

淵の底

伊藤桂一

新潮社

淵の底

四六〇円

昭和四十二年八月二十五日 印刷
昭和四十二年八月三十日 発行

著者 伊藤桂一

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話(260)一一一一
振替東京八〇八

印刷所 二光印刷株式会社
製本所 新宿加藤製本所

乱丁、落丁本はお取替え致します。

長編「淵の底」・目次

鷺^{さぎ}

兎
罌

十二
单衣^{ひとえ}

夕
顔の女

虹

七

三

五

八
四

一
〇
九

こおろぎの庭

一四

竹光

一五

小さな幟のぼり

一六

淵の底

一七

插装
絵幀

佐
多
芳
郎

淵
の
底

鷺(さぎ)

一

——偶然かもしれない。しかし、それにしても、ふしぎなことがあるものだ。

山を下りながら、新村佑伍はそればかりを考えた。彼はとにかく、さわやかな感動を覚えていたのである。山を下って、そのまま、まっすぐに、中郷治太夫の屋敷へ赴くつもりであった。このことについては、いく日も考えてきたが、きょうははつきりと、心をきめている。

佑伍はいま、中郷家の墓前で、

「中郷さん。くやしかったでしょう。私にはあなたの気持はよくわかります。たとえ世間全部があなたにそむいても、私だけはあなたの潔白を信じています。瞑目してください。なんの力にもなれませんが、でもなにか、お役に立つことをしたいのです」

と、治太夫の霊に誓ってきたばかりである。

城下の町へ出ると、武家屋敷のつづく一郭の、いちばん外れに中郷邸があつた。表門はつめたく閉ざされている。右側は小路になり、それを行くと横手に小さな冠木門かんぎもんがある。そこから庭を縫って、道が台所と玄関へ通じているのだが、佑伍が冠木門のところまで来たとき、

「あ。佑伍さま」

と、呼びかけてくる声が、生垣の上からきこえた。

みると、ささんかの花の陰から、たすきをかけた、勇ましげなみなりの、多恵の顔がのぞいていた。治太夫の娘で、十八歳である。佑伍はふしぎな気がした。中郷一家の者は、沈鬱な表情で顔をつき合っていて、訪ねて行ってみても、言葉のかけようもないのではないかと、と、それをしきりに苦にして来たのだが、生垣の上からのぞいている多恵の顔いろには、これという暗さもなく、それどころか微笑さえうかべている。

佑伍は足をとめたまま、黙って、頭を下げた。

「うちへ、いらしていただいたのですか」

と多恵はいった。声にも張りがあり、凛々しげである。

「そうです。母上は、おいでですか」

「おります。弟も」

「それはよかった。入ってかまわないでしょうね」

「はい。いま、あけます」

佑伍が門の前に立っていると、じきに門はあいたが、多恵は、佑伍を誘わずに道に下りてきた。まぢかに来てみてわかったのだが、多恵は庭の掃除をしていたのである。左手に手拭をもっていたから、髪にかぶせていたのをはずして、佑伍に挨拶をしたものだろう。

多恵は、身体がストレスになるくらい佑伍に近づいてくると、

「私、いま、門をあけながら考えたのですが、私たちはかまわないのですが、あなたにご迷惑が

かかるかしれません。だから、ここへ母を呼んで参りましょうか。そのほうがいいのではありませんか」

といった。多恵は、髪油のほかは、香料も白粉もつけてはいないのだが、若いから、若い匂いが佐伍を圧迫する。淡いめまいでも起しそうなほどである。佐伍は一步、後ずさりをしていった。「私だったら、かまわない。だれに遠慮があるものですか」

「あなたはお若いから、そんなことをおっしゃるのです」

多恵は、自分の若いことは棚に上げ、どことなく姉さまぶって、とにかくここに待っていてほしい、ひとこと母に通じて、そのあとでなら入っていただけでも私の責任ではないから、とこれもつとめて明るい口調でいって、裾をひるがえすような速足で、冠木門をくぐってもどって行った。

少時、その場に立って佐伍は考えていたが、返事を待たずに多恵のあとを追って門をくぐっている。いま、眼の前に対した多恵をみてはじめてわかったことだが、多恵の表情は明るいものもなく、その心情が痛手ににぶいのでもない。一家が悲嘆の底にあるから、稚い知恵で、せい一ぱい元気にふるまっているだけのことである。多恵の女の香にまじって、その心立ても同時に、佐伍の胸に匂い立ってきたのだ。

——かまわん。なにも悪いことをしているわけじゃないじゃないか。

飛ぶ鳥は跡をにごさず——空けてゆく屋敷や庭を、整然と掃きよめておきたいために、多恵はかいがいしく、立ち働いていたのだらう。箒の跡目の残っている中庭の道をたどりながら、佐伍はいまさらにこの家の、閉門、蟄居、切腹、家名断絶——とつづく、悲劇の転変を思いみたの

だ。

多恵の母の浜枝は、佑伍が訪ねてきたことを、少なくとも言葉の上では歓迎しなかった。ここへは藩命を帯びて訪ねてくる人のほかは、だれも来なかつた。平素親しげであつた人たちも、累の及ぶのおそれなのか、気の重い訪問を嫌つたのか、とにかく客足が絶えて、家族だけがひっそりと暮してきたのだ。

治太夫が切腹して、その葬儀も内々にとり行つたが、さすがにそのときだけは、公私ともども、みとり役や少数の見舞客は来たが、それも儀礼的で、人間失脚してしまうと、こうも冷たい目でみられるのか、という想いを濃くしただけである。

「私どもはかまいませんが、あなたやお宅にご迷惑がかかると 생각합니다。お気持はよくわかつています。ですから、このままで、お引きとりいただけませんか」

玄関先にいる佑伍を前にして、浜枝はそういつた、いいさとすような口ぶりである。

佑伍は、型にはまつた弔問をひと通り述べたあと、言葉を改めて、

「長くはお邪魔しませんが、いけませんか」

といつた。いいながら、浜枝のうしろに膝を折つている多恵を見ていた。多恵から感染したためもあるが、佑伍の口調はしつかりして、婉曲なことわり方では、帰りそうもない氣ぶりに満ちていた。

「私たちはもう、科人^{しやうじん}として藩を追われた身です。できるだけ静かにここを落ちたいのです。家の中も、とり散らかしておりますから」

佑伍は、浜枝のその言葉を、

「そうですか」

と納得したように受けたのだが、それでいて帰るのかと思うとそうではなく、そのまま片隅に履物を脱ぎはじめ、

「とにかくちよっとお邪魔します。このままでは、私は帰れないのです」

といって、式台の上に立っていた。

「お母様。佐伍さまは、なにかおっしゃりたいことがあるのですよ。きかずにお歸し申しあげることが失礼です」

いずれにしろ、心のなかでは、来た者も迎えた者も、通じ合つてはいたのだ。だから、多恵が横から口を出し、先に立つて佐伍を伴う形になったとき、浜枝も、それ以上はなにもいわなかった。かえって、ほっとした表情をみせたほどである。

佐伍が座敷へ通されたとき、裏庭で、不要な家具や塵芥を焼いていたらしい、多恵の弟の規久之助は、これも両肌でも脱いで働いていたらしいのが、身じまいをしながら廊下から上がつてくると、

「よくいらつしゃいました。ごゆっくりなさってください」

と、佐伍をみて挨拶した。規久之助はまだ十五歳だが、父亡きあとの責任感のためだろう、この前見たときとくらべて、ふいにおとなになっていくかんじがする。以前だったら規久之助は、「どうですか。兎^{うさぎ}でもかけに行きませんか。いい場所をみつけてあるんです」

などと、気軽に口をきいたものだ。

佐伍は挨拶を返しながら、ひとこと明るい話題をのべたかったが、規久之助のおとなっぽい

が邪魔をして、それはいいそびれ、

「君も一緒にきてくれないか。さきほど、お父上の墓参に行ってきた。そこでみたんだが、墓のまわりに、鷺が一羽いたんだ。ふしぎだと思わないかね」

といった。

「鷺がですか。あの鷺でしょうか」

「それはわからない。偶然かもしれない。だが、私がいるあいだ、逃げもしなかったからね。たとえ偶然にしても、私は私でやはり考えさせられることがあったんだ」

佐伍はそれから、茶菓をもてなしてくれる浜枝や多恵にも向けて、中郷家の墓所のまわりに鷺が一羽遊んでいた情景を、こまごまと語った。

二

あれはいつごろだったろうか。

その日、佐伍が中郷家を訪ねてくると、治太夫は庭の片隅で、竹でこしらえた、急造の鶏小屋のようなものの前に、しゃがみ込んでいた。

佐伍が近づいてみると、なかに飼われていたのは一羽の白鷺である。鷺はかなり治太夫に馴れていて、彼が手を出すと、遊びを楽しむように、くちばしをのぞけてきたりするのだ。そばで見ると鷺は、幾重にも輪郭のある、美しい眼をしていた。

「妙なものをお飼いですね。どこで捕まえられたのですか」

佐伍がしやがみ込んでたずねると、治太夫は機嫌のいい顔つきになった。

「捕まえたのではない。ケガをしているのを、拾ったのだ」

「いつのことですか」

「もう十日ほどになるな。こいつはそのとき、青田を翔はつては落ち、また翔はつては落ちして、そのときわしの通っていた道のほとりの、畦の上に落ちて動かなくなった。白いからよく眼に立つ。近づいても逃げない。鶯とびか隼はやぶさにでもやられたのではないか。頸のうしろにひどいケガをしていた」

その鶯をもって帰って治療した。どうも助かりそうもないと思ったが、人間に効く薬は鳥にも効くとみえて、だんだんと元気になった。餌には泥鰌どじょうをやった。泥鰌は規久之助がいくらも捕ってきた。野生の、それもおとなになった鳥だから、飼われることもいやだろうし、またそれほどなつきもすまいし、ケガも癒えたようだから、ほつほつ放してやろうかと思っている。

治太夫は、鶯の姿態に見惚れるような眼をしながら、そのとき、佐伍に語ってくれたのである。

——まさかに、その鶯が、治太夫の死を悼んで、その墓前を徘徊していたとは思えない。それは、いま、佐伍の話をきいているだれもがそう思ったことだろうが、しかし、それでいて、佐伍の言葉からの、さわやかな感動だけは受けとめていたようだ。わざわざこの話を伝えにきてくれた佐伍の心根に対する謝意は、多恵はもちろんのことだが、浜枝や規久之助の眼もともによくあらわれている。

「よいお話でした。あたたかく、心の慰められる想いがします。そういえば、放してやったときも、なかなか逃げませんでしたね」

浜枝は、以前のことを思い出したように、その眼を多恵に向けた。

浜枝を中心とする一家三人の者は（二人の使用人には、ひまをやっていた）陰気に沈んでいられる場合ではなく、先のことを考えねばならぬ日々を追われている。そのためか、いつもの落ちつきはないが、しかし、気の張りからくる、活気に似たものはかんじとれたのだ。

放してやった日、夜になるまで、鶯は庭で遊んでいた——と、多恵も規久之助もそのときのことを語った。翌日の朝はもういなかった。遊びにくるかと思つたが、遊びにも来なかった。

「遊びに来たら、やるつもりで、泥鰌だけはたくさん捕つておいたのです」

と、規久之助はいった。

「鶯が来ないから、その泥鰌は、君が食べてしまったのだろう」

と佐伍がいったとき、一座の者ははじめて頬をゆるめ、多恵だけは、低く声に出して笑った。

「実は、お話し申しあげたいことの用件ですが」

と、それをしおに、佐伍は形を改めた。

この一家の人たちに語りたかったのは、なにも鶯のことではない。もはや、それをいつてみても、かいのないことかもしれないのだが、黙っていることもできないとする、ひとつのことが佐伍にはある。

はじめ、つまり国元勘定方中郷治太夫に「不届ノ廉アリテ閉門申シ付ケラル」という達しがあつて、それを知ったとき、勘定方の末輩として出仕していた佐伍は、いずれは黒白がわかることだろう、と、まだ成りゆきに、一応の安心感は抱いていた。

しかし、程なくして治太夫が切腹し、それが身の潔白を示すものとして行われたものでありな